

き原野あり。

都農

宮崎より北に距ること十一里、國道線路中の宿驛なり、名産の雲丹は世に賞味

せらる、都農神社は國幣小社、大己貴命を祭る、日向國式内神社四座の一にして、一の宮と稱し、最も著名の社なり、其創建の古き事は、古書舊記に徴して明なり、仁明天皇紀、清和天皇紀、延喜式神名帳にも明記せらる、社殿の如きも往古より壯觀なりしが、天正六年十一月 大友宗麟の島津氏を攻めし時、兵燹に罹り、數多の社殿、古記寶物等を燒燼し、一時荒涼の地となりしとは、延寶三年、橘三喜が一宮巡詣記に見わたり、然れども領主秋月氏の崇敬深く、社殿を造營し、屢神領幣帛料等の寄進あり、明治四年五月、國幣小社に列せられ、次で社殿を修繕し、更に壯殿を加へぬ。

境内廣濶、神苑は老樹鬱然、假山泉石の觀殊に雅潔にして、反橋、櫻馬場等眺望また絶佳なり、寶物は推古天皇の御宇、秦河勝に勅して獻られしといふ神面一個あり、此の神面のみ奇しくも天正の兵燹を免れ、今猶存在し貴き神寶となりぬ。

彼の、橘三喜が、一宮巡詣記に都農町はづれに二の鳥居の跡ありと見ゆる、此の鳥居の跡は都農町の北端にあり、今に大石存在せり、同記に、社より十四五町程海邊に三の鳥居の塚あり、其處を鳥居原といふとある、三の鳥居の塚は、都農町の南端の少し東方にあり、

又同記に山續き西の方御尾山といふ所に腰掛石とて、都農明神御腰をかけ給ひしといふ石ありとある、其腰掛石は、今は字瓜生の地内にあり、土人は之を俵石といふ、形の似たるを以てなり、石の大長一丈五尺幅三尺周圍一丈二尺あり、此近傍の原野より曲玉、石斧、石鏃等往古の遺物多く出づ。

尾鈴山 都農町の西北にあり、卓然萬峯を抜いて半天に屹立す、高三千尺、樹木鬱蒼街道より望めば、胸宇濶大、意氣壯快ならしむ、名貫川、都農川等の清流皆源を此に發す、山の東南麓に矢研瀑あり、尾鈴神社の拜殿より二十四五町、荆棘を分け、峻岨を登りて達すべし、岩口より岩腹に傳うて下ること十八丈、其より以下谷底に直下すること又十餘丈幅一間半、之を望むに幾端の白布を懸くるが如く、頗る壯觀。

都農町の北藤見山に不動瀧あり、水岩口より岩腹に傳うて下ること三丈餘、湖底に直下すること更に六丈餘、幅三間奇觀なり。

美々津港

宮崎より北に距る十四里、美々川の下流海に注ぐ處、港内清澄、暗礁なく船舶の出入に便なり、港口に二個の岩礁突出す、之を黒島、八重島といふ、美々津の市街は南涯より磯邊に沿ひ、岡阜を負うて家屋櫛比す。戸數四百、郵便電信局、銀行支店等あり、商業盛なり。

美々津官修墳墓地

美々津村高松正寛寺にあり、明治十一年二月の開設、明治十年の役に戦死せし細谷卓良の墳墓あり。

立磐神社

美々川の南岸、渡船場の西にあり、神武天皇東征の時、此地より解纜し給ひたれば、此社を建て、天皇を奉祀すといふ。

美々津は天皇乗船し給ひし遺蹟なれば古は御津と稱へたるを、何時しか美々津と訛稱するに至りぬ。

神武天皇御腰掛石

立磐神社内にあり、石の玉垣を環らし、之を祭る、同地土人の口碑に存するもの十餘あり、今其一二を記さむに、天皇東征の時、此地にて舟楫を備へ給ふ時、石上に腰を掛けて指麾し給へり、今の腰掛石是なり。

八朔(八月朔日)御乗船の節、人々團子を製して獻らむとせしも、俄に御船出なし給ふこととなりしかば、調製すべき暇なきを以て、皿にて突き交せて奉れり、其を「つきいれ」といひぬ、此古例によりて、今も八朔には、突き入れを製して、神前に獻り、御船出ありし日を祝ひまつるなり、又八朔には、天皇は御船出遊ばし給ひて、其儘御歸りなかりしを惜み今尚此日は美々津より出船をなさすと、又天皇御衣の綻びを立ちながら縫はしめ給ひしことありしとて、此邊を立縫の里といへり、古歌に曰く。

みづこは誰がいひそめし旅衣君きてぬふや立縫の里

又古賀侗庵の詩に曰く

帝賜靈根耳水干。風光何會畫中看。爾來閱曆三千歲。永奠皇基盤石安。

美々川古戰場

歴史上著名の古戰場なり、天正六年八月、大友宗麟五萬の兵を發し

高城を攻圍せりとの急報、鹿兒島に達しければ、島津義久、薩隅日三州の兵を率ゐて、十一月上旬來援したるに、豊後勢は退き、美々川の北岸に陣し、薩摩勢は進んで美々川の南岸に陣し、兩軍川を夾んで對陣す、時に十一月九日なり、豊後の先鋒、吉弘鑑理齋藤鎮實等は、我兵多しと雖ごも、烏合の衆に過ぎざれば、麾下の後援なくんば先に進むとも、後陣より崩れ立たむ疑ありとて宗麟の本營牟志賀に急使を馳せ、頻に宗麟の進軍を乞へども寵臣田原紹忍は然るべからずと申送りしより、宗麟紹忍の言に従ひ、諸將の建言を用ひず諸將憤怨、此上は屍を美々川に晒す外なしとて、翌十日豊後の猛將等、川を涉りて薩軍に攻入り、必死の勇を奮ひしかば、流石の薩兵も引色になりて、馬標靡き立ちしが、田原紹忍は薩旗の此方に進み來るものと誤認し、早くも逃支度をなしかければ、豊後勢果して後陣より崩れ立ち、竟に總敗軍となり、名將猛卒同じ枕に戦死せしもの多かりき。此役豊後勢の戦死者四千餘人にして、薩摩勢の戦死者三千餘人。

杉安堰

上穗北に一條の大川あり、西北より南下し、下穗北村及新田村佐土原村の一部を貫流して海に注ぐ、是則一瀬川なり、享保五年同村の篤志家兒玉久右衛門、土質の肥沃なるに不拘、水田の寡少なるを憂ひ、大に水路の必要を感じ、此一瀬川の沿岸杉安を基點とし、水路開鑿を企畫するや、工事遅々として運ばず、世評終に穗北の阿辰堀アチノボリと稱するに至れり、此風評は倍々工事の進捗を妨げ、一方には工費供給の途を失ひ、進退爰に谷まる此悲境に際し、同村の豪農黒木彌能右衛門の放資助力に依り。再び工を起し、竣工に至る迄八ヶ年の永きに涉れりと傳ふ、久右衛門が苦辛慘憺の情、實に想ふべきなり、此水路は延長殆んど三里、穗北一圓(明治二十二年上)八百町歩の灌漑に供し、爾來旱魃を憂たることなし、現今上下穗北の村民にして、當水路の恩恵に浴するは、全く故兒玉久右衛門、黒木彌能右衛門の苦心經營の賜にして、今尙久右衛門の子孫をして、水路の管理に任せしめ、其報酬として年々十四石四斗の玄米を贈りつゝあり。

二八、東。白。杵。郡。

總説 縣の北方にあり、東は海に臨み、西は西白杵郡に隣り、南は兒湯郡に接し、北は大分縣豊後に界し、東西八里九町、南北十五里二十五町、面積百方里餘、戸數一萬八千

二百七十五、人口十萬九千六百一。

延岡細島の二町、岡富、恒富、伊形、門川、富高、岩脇、東郷、南郷、西郷、北郷、北方、南方、東海、北川、南浦、北浦の十六村に分ち、東南海に面し、細島、土々呂、東海、島浦等の港灣あり、運輸頗る便利なり、西北は山岳連亘するも、道路開鑿、交通の便あり、郡の北隅に北川中央に五ヶ瀬川、南方に美々津川あり、舟筏を通すること海口より七八里、若くは十三里なるを以て、運輸に便なり、地味は東南隅沿海は輕砂土なるも恒富、岡富、二村の如きは、本縣第一の膏腴の地と稱せらる。

物産は茶、麻、玉蜀黍、材木、薪、木炭、銅、紙、鹽鱈、鹽鱈、其他海產物。

延岡町 往時縣と稱せしが、元祿五年二月、延岡と改む、内藤氏七萬石の舊城下なり宮崎より二十二里十二町、細島より六里十七町、豊後國界赤松へ七里二町、郡役所、區裁判所、郵便電信局、警察署、稅務署、小林區署等の諸官衙、縣立延岡中學校、私立延岡高等女學校、同女子職業學校、高等小學校等の諸學校あり、五ヶ瀬川市街の中を流れ、東海港に注ぐ、板田、大瀬の二橋を架す、町民は大率商業を營み、豪商多し、當地に産する香魚は、味頗る美、大に世人の賞翫を受く。

延岡城墟

延岡城は、舊内藤氏の居城、明治四年七月廢藩の後全く廢毀に歸し、今公

園となりぬ、延岡市街の西北に屹立し、高さ海面より十八丈強、周圍三町十九間、其初めて築きしは土持氏にして、高橋、有馬、三浦、牧野、内藤の諸氏皆相襲ぎて此城に居る、頂上に鐘樓を設け、時報をなす。

明治三十九年、土地の有志相謀り、日露戦役紀念の爲、地を拓き吉野櫻、楓、梅、桃其他種々の樹木を植ゑ、大公園となし、東曰杵郡内、日露戦役戦病死者招魂碑及び日露戦役紀念碑の二大碑を建設し、一は東郷大將、一は大山元帥の揮毫也。

今山は岡富村大字岡富にあり、其嶺には縣社安賀多神社(天照太神外二神を祀る)郷社今山八幡神社、(豊田別命外二神を祭る)あり、東は東海港を隔て、日向灘を望み、西は南方村の諸山に對し、南は延岡市街を瞰下し、眺望頗る佳、花時の風景甚美なり、弘法大師を八十八ヶ所に勸請す毎年三月參詣多し。

愛宕山公園 恒富村の中央群峰聯綿の中にあり、高六十丈、山腹に愛宕神社を祀る當社は往古縣城(延岡城舊稱)内に鎮座ありしを、慶長元年に當山に遷し、笠沙山を愛宕山と改む、有馬、三浦、牧野、内藤諸氏代々の領主の尊崇厚かりし社なり、境内に櫻樹を植ゑ、堂宇を建て、噴水を設け、風致を添へて遊園地となす、延岡市街、東海港等雙眸の中に聚り、眺望甚佳なり、郷社恒富神社は大字恒富にあり、天兒屋根命、武甕槌命外五神及

ひ土持兼重を合祀す、元正天皇の養老二年の創立なり、境内頗る廣く二の末社あり。

三福寺 延岡町北町にあり、淨土宗京都知恩院の末寺、延享後内藤家の菩提所たり、僧幡隨、肥前國高來より來り、此に居る、後江戸増上寺の僧正となるに及び、弟子信譽を留めて、慶長十九年創建せり、境内に有馬左衛門直純及内藤家代々の墓あり。

幡隨上人墓 三福寺の門内に幡隨上人の墓あり、上人の死後、市人其德を慕ひ、墓を立て、毎月五日參詣す。

延岡官修墳墓地 延岡北町三福寺にあり、明治十年九月開設、明治十年の役に戦死せし高橋種文の墳墓なり。

櫻子墓 延岡町にあり、謡曲に記せる所の櫻子の墓は、其書中にあるが如く、舊廓内天神小路の藪中にあり、墓邊南天樹多く、荆棘に埋り居れり、里人此墓の南天に觸るれば腹痛すとて近寄るものなし、又櫻川は古は同所附近より流れ字船倉に至り大瀬川に注ぎしが、今は其半ば濠となり、其下流は市内の悪水路となりて、中町裏を通る。

安賀多神社 岡富村字古川にあり、天照太神外七神を祀る、養老年間、今山に勸請せしを、寛永年間領主有馬氏現今の地に奉遷し、神殿を建立す、日向國の大社にして累世諸人の崇敬厚し。

龜井神社 岡富村大字岡富にあり、菅原道真、倉稻魂命及び内藤家長、同元長を祭る。正保三年の創建、元、天満神社と稱せり、明治五年龜井神社と改稱せり。

細島官修墳墓地 細島町日知屋にあり、明治十一年四月開設、明治十年の役に戦死せし二百五十二人の墳墓あり。

海賀直求墓 細島港の南涯金ヶ濱にあり、直求字は徳門、通稱宮門と云ひ、筑前秋月藩士なり、幼より文武の道を講じ、皆其蘊奥を極む、夙に勤王の大義を唱へ、四方に往來して俊傑の士と交る、人と爲り魁偉疎豪、毫も邊幅を修めず、其大義を論じ時事を談するや、慨慷扼腕、義窮り言盡くるに至りて止む。

嘉永の年、洋船邊海に出没し、勤王攘夷の説大に起る、偶福岡藩士月形格等屢々時事を建議し、納れられず、宮門此徒と往來せしかば、連坐して嘉麻郡に謫せらる、翌年春、浪華に脱走し、同志と事を伏見に舉げむとす、時に朝廷薩人に勅し、之を鎮撫せしめむとし、各其郷里に還し、或は薩摩に送りて之を監護せしむ、宮門亦其中にあり、即ち同行二十餘人大阪を發す、船中時事を論じて合はず、上陸決闘を約す、宮門單身薩の壯士二十餘輩に當り、勢敵せず、遂に亂斫せられて死す、享年二十有九、實に文久二年五月八日なり、爾來金ヶ濱に一基の木標を建て、宮門致命の地たるを示すに過ぎず、慘風凄雨、幾歲月を

經て、明治二十四年十二月に至り、特旨を以て正五位を追贈せられ、靖國神社に合祀せらる、今の墓碕は同國人有村重節が秋月古香に題字を乞ひて建設せるものなり、宮門死する時、袷衣に自署あり、曰く「平生心事豈有他。赤心報國只此時」と、蓋し豫め死を期したる也。辭世の歌に曰く

夏の夜の短き床の夢だにも國やすかれと結びこそすれ。

本善寺 富高村日知屋にあり、本門宗興門派の寺院、建武二年一月の創立、千葉縣安房國平郡保田村妙本寺開山宗祖より、第四世日郷上人法弟日叙上人開基、西國唱導師の任に補せられ、宗風を煽揚せりといふ、爾來現任住職に至るまで、聯燈二十五世、五百五十餘年。

無鹿 東海村無鹿の地は、明治十年の役兩軍の激戦せし所、此附近其營址數ヶ所あり。

東海港 五ヶ瀬川と北川と相會する處の海口にあり、港口東南に向ひ、東は東海山を負ふ、濶さ三四町深さ六七仞、港内暗礁なく、出るには西風を宜しとし、入るには東風南風を宜しとす、一時は大阪航路の汽船出入せしが、今は唯和船の出入あるのみ。

行滕の瀑布 南方村行滕山にあり、箭筈の瀑といふ岩間より瀉ぎ出で、岩を絡ふて下る、高十八丈、幅十五間、頗る壯觀、傳へいふ景行天皇の御宇、日本武尊川上梟帥征伐の

時、此瀑を御覽ありて

ののびきの箭筈の瀧に來て見れば川上たける落ちて流る。

どの御詠ありきと、今猶延岡地方にて神樂歌に用ふ。

全長寺

北郷村宇野間にあり、曹洞宗の寺院、天正元年、天台宗正年僧正創立の堂宇に、本尊延命地藏を安置せしが、兵亂の際堂宇焼失、尊體は山頭に飛行し居りしを靈佛なりとて村民一字を建て、之を安置せり、元祿元年、字中原に移し、堂宇を創立し、正觀世音菩薩を安請し、其後了異和尚、號を鐵城山全長寺と改稱せり。

神門神社

南郷村神門イカドにあり、伊弉册命、大山祇命外五神及び百濟國伯知王靈命を祭る、養老二年の創立、元、神門大明神社と稱せしが、明治四年十一月、字落原の地主神社字、田爪の若宮八幡神社、字假屋の愛宕神社、字黒岩の天満神社を合併して、神門神社と改稱し、同五年郷社となりぬ。

可愛嶽の陵

可愛嶽は北川村の西隅に峙ち、高さ二百十丈、岳頂突兀たり、其山麓に陵墓あり、村民相傳ふ、瓊々杵尊の陵なりと、近傍より曲玉、鐵石等の出ることあり、明治三十年陵墓傳説地として宮内省より保存せらるることとなりぬ。此山は丁丑の役西郷隆盛、桐野利秋等の屯せし所、今尙營址を存せり。

慈眼寺

北方村字曾木にあり、曹洞宗の寺院、天文元年の創立、開基は甲斐周防守重吉、剃髮して澤叟善勝止座と稱す、天文二十一年九月卒す、開山は傳應宗達大和尚、中興開山は、東曰杵郡岡富村臺雲寺靈峰大和尚法幢、地開闢は台雲寺十三世月峰大和尚なり、明治四年北方村善財院を廢して當寺に合併す。

僧胤康の碑

北方村曾木慈眼寺の境内にあり、胤康名は定康、武藏の人、其先北條氏康に出づ、曾木慈眼寺に居る、夙に皇室の式微を嘆じ、勤王の大義を唱へ、諸藩に遊歴して志士と結ぶ、文久三年二月十一日、延岡藩の爲に捕はれ京都に送られ、慶應二年五月十八日獄中に死す、辭世に曰く

みじか世の夢と思へばあぢきなき覺めしあまたにかたるはらなし。

明治三十年十月有志相謀つて碑を建つ、碑文は秋月古香の撰する所、同所に曾木神社あり伊弉册尊外二神を祭る、養老三年創建する所、舊稱熊野權現といふ。

二九、西。白。杵。郡。

總說

縣の北隅にあり、東南は東白杵郡及び兒湯郡に接し、北は豊後に界し、西は熊本縣に界し、東西九里十二町、南北十四里七町、面積七十二方里、戸數六千八百八十六、人

口四萬二千三百二十、

高千穂、上野、岩戸、七折、岩井川、諸塚、椎葉、鞍岡、三ヶ所、田原の十ヶ村に分ち、四方山を以て圍まる、人情質樸、太古の遺風あり、北方に五ヶ瀬の上流、南方に美々津川の上流あるも、水利の便少きを以て、農事は概ね畑の耕作也。

物産は、玉蜀黍、椎茸、材木、麻苧、茶、烟草、銅等あり。

三田井

郡役所、葉烟草專賣所、出張所、稅務所、區裁判所、警察署等あり、氣候は

縣下最も寒し、太古美田居と稱し、神武帝の皇兄五瀬命、比波里田、美録田の三田と天の

眞名井、逢初川、比波里川の三井を合せて、三田井と改め給ひしといふ、古記によれば此

地を以て上代天孫降臨の靈地となし、一は霧島山を以て其遺跡なりとすれども、今考ふべ

からず、此地方より太古の石器陶器等を掘出すことあり。

四王子峰

高千穂村にあり、古の高千穂宮の址、彦火瓊々杵尊、彦火々出見尊、鷓鷯

草葺不合尊の三神の皇居にして、五瀬命、三毛入野命、稻飯命、狹野尊(神武天皇の御幼

名)の四王子御誕生の地なるを以て、此名ありと傳ふ、山水の勝に富み、峰高く溪谷幽邃。

三田井親武首塚

七折村宮水神社の側にあり、墓石高五尺、冠するに石蓋を以てす

正面に越前守三田井近武君の墓の十一文字を刻し、左側に享和三年八月再建の十字を刻す

三層基あり、皆高一尺二寸餘あり、又首塚の左右に二碣あり、高さ首塚より稍低し、一は

正面に三田井家供養塚と記し、一は三田井家臣供養塚と記す、三田井親武は世々高千穂を

領し、三田井村中山淡路の城に居りしが、天正十六年の縣の城主高橋種統の爲に亡さる、

又三田井町の後に天真名井あり、老楠の根より清水湧出す、村民神代川と稱す。

三田井官修墳墓地

三田井村城平にあり、明治十年六月の開設、明治十年の役に戦

死せし四十人の墳墓なり。

高千穂神社

高千穂村御鹽井にあり、三毛入野命を祭る、本社神殿の彫刻頗る巧妙を

極む、境内に秩父杉あり、老幹天に冲す、相傳ふ秩父重忠、源頼朝の代參として來り、此

杉を植ゑたりとぞ。

美祿田

一名不苗田といふ、種子を蒔かざるに、自然に稻生ずとなり、十社宮の下、

御鹽井五ヶ瀬川の岸にあり。

鬼の窟

高千穂村十社宮の後、五ヶ瀬川の東岸にあり、恠巖川に臨みて突出す、其數

九個、其の間に深き谷八ヶ所あり、中部に一の窟あり、蘭の郷と稱す、上古鬼八なる者の

住む所、其附近山水明媚、來り見る者多し。

七ツ池

高千穂村鹽井なる五ヶ瀬川の傍にあり、周回十間、岩石の内に七ヶ所の池あ

り、水色各異にして、頗る奇觀なり。

百丈ヶ瀧は七ツ池の東北にあり、巖壁の間より清水奔流して瀧となる、其百丈ヶ瀧附近、神橋の畔に月形、日形といふものあり、數丈の巖壁に、圓き坎窪二箇を印す、其月に類するものを月形、日に類するものを日形といふ。

羅漢窟 七折村の北、戸川にあり、岩山の東腹にある窟なり、其口東に向ふ、高九尺幅三間深二間、窟内は衆石簇出、大小の別なく、皆自然に羅漢の狀をなす、故に此名あり例年舊曆正月十六日里人の參詣多し。

黒尊石 七折村の北麓川にあり、樹木鬱蒼の中に奇石直立す、高三丈二尺周圍、十二間、北面の半腹に一段落あり、幅二尺餘呼んで膝の上といふ。

天の窟戸 岩戸村、岩戸川の東北岸斷崖の半腹にあり、天然の岩窟、側に雜草茂り樹木生ひ、人跡至る能はず、川を隔て、其西南岸に天の磐戸神社あり、天の浮橋は岩戸村笹戸橋の下流二丁許の處にあり、兩岸より兩岩突出、各二間餘、其中央斷ゆ、其の間相距る四尺、流水岩の上下を行く、岩恰も浮ぶが如し、古來相傳へて浮橋の名あり、又高天原は高千穂村狭山にあり、神代の遺跡として最も尊き所なり、又穗觸山は高天原の北にあり、縣社二上神社鎮座あり、社地廣一町四反九畝餘、瓊々杵尊を祭る、此地は即ち高千穂峯にて

天孫降臨の地なりと傳ふ、又天香山は、高千穂村淺ヶ部、猿伏の上にあり、傳へ云ふ天照太神天磐戸に隠れ給ひし時、神樂を奏するに、此山の眞坂樹を取りたる古跡とて、今も尙諸神の祭禮には、此山の神を用ふ、又同村吾平に吾平山あり、相傳ふ鶉鷺草葺不合尊の山陵なりと、昔より婦人は到らず、男子と雖ども參詣の折は履物を脱す。

二上山 三田井字押方小谷内にあり、一名を神山といふ、高三百四十二丈餘、二峯あり、東西に雙立す、其形突兀として尖れり、故に二上の名あり、村民相傳へて天孫降臨の山なりと云ふ、此山に伊弉諾尊、伊弉冊尊を祭る、村社山附神社あり、山麓山腹には十數ヶ所の古跡を存す。

二上神社 縣社にして宮小野の林丘上にあり、社地廣一町四反九畝餘あり、彦火瓊々杵尊を祭る、舊稱穗觸大明神といふ明治四年今の名に改む、例祭は十一月四日。

祖母嶽 田原村の東に聳ゆ、肥後豊後日向の三國に跨る、三國の稱あり、高六百三十丈、周圍十八里、北に筒嶽を狹み、南に黒嶽を擁し、嶺上より東北は豊後に屬し、西は肥後に屬す、東南は日向にして、其四麓に八百八谷あり、嶽頂石を戴き、高樹なく、唯短弁を生ずるのみ、四五月の際、雪解ければ群草花を開き、紅白美觀を呈す、花は躑躅、殺盆子多し、半腹以下は榎、槻、赤松等生ず、絶頂に五ヶ所神社あり、豊玉姬命を祀る、姫嶽大

明神といふ。

玄武城墟 上野村と田原村との界、玄武山の巔にあり、四面壁立、千仞攀ち登るべからず、唯南腹は峻阪纒に登るを得べし。

鏡山 三ヶ所村の西隅肥後界にあり、高三百四十丈、満山草を戴き、只東腹に僅少の樹木あり、往昔此山にて八咫の御鏡を作りし故、鏡山といふとの説あれども、容易に信じ難し、丁丑の役、官賊の兩軍大に此山に戦ひぬ。

椎葉山 椎葉村にあり、舊肥後人吉藩の治下にて、往古より土豪奈須氏の所領なり、奈須家系には、奈須興市宗高の子小太郎宗治、文治中薩摩に下り、其後日向臼杵郡に住し、其裔孫美作守高祐に至つて椎葉山小崎城に住す、又、其同族左近將監祐安神門城に住すとあり、椎葉山記及奈須根元記には、文治元年壇浦にて死亡せし平家の遺族、椎葉山に逃竄せし由、聞ければ、元久二年鎌倉幕府奈須興市宗高に命じて征討せしむ、宗高病を以て辭し、弟大八郎宗久を進めて代らしむ、宗久日向に下り椎葉に入り、平家の遺族を平ぐ、宗久の子孫奈須氏を繼ぐと記す。

安井息軒の唾餘漫筆には源頼朝の時平氏の遺族、豊後日向の山中に聚ると聞て、奈須興市を討手口に遣す、興市其勢の微弱にして、事を興す能はざるを見て、之を憐み、歸りて虚

説なりと白す、其恩を忘れざる爲に、邑人皆奈須を以て氏とす、後遂に地名となれり、是れ蓋し古來傳説に據れりとあり、徳川氏の世に至り、奈須將監神門城に居り、縣城主高橋氏に屬す、寛永十五年讒を以て高橋氏に殺され、家絶ゆ、奈須彈正は向山城に居る、嫡男を久太郎といふ、元和の初、怨を以て土寇に殺され、家絶ゆ、奈須左近大夫は、嫡男主膳と共に小崎の城に居る、主膳の嫡男亦土寇に殺さる、元和四年主膳徳川氏に請ひ、土寇十三人を誅せしも、山中騷擾、各黨を結びて嘯集す、元和五年四月、徳川秀忠、阿部四郎五郎等を遣はし、糾彈の後、奸黨二百四十四人を討し、正黨八百餘人を賞しければ、乃ち始めて鎮定せり、是歳幕領となり阿蘇社神主をして之を管せしむ、明暦二年より更に人吉の領主相良壹岐守に命じ、之を管せしむること二百十六年、明治四年廢藩の時、一旦熊本縣に屬せしが、六年宮崎縣に屬し、九年宮崎縣廢せられて鹿兒島に屬し、十六年鹿兒島を分て再び本縣を置くに及び、又本縣に屬せり。

宮崎縣案内記終

明治四十年十月十五日印刷
明治四十年十月廿一日發行

(非賣品)

著作兼發行人

若山甲藏

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上別
府八幡馬場二百五十番戶

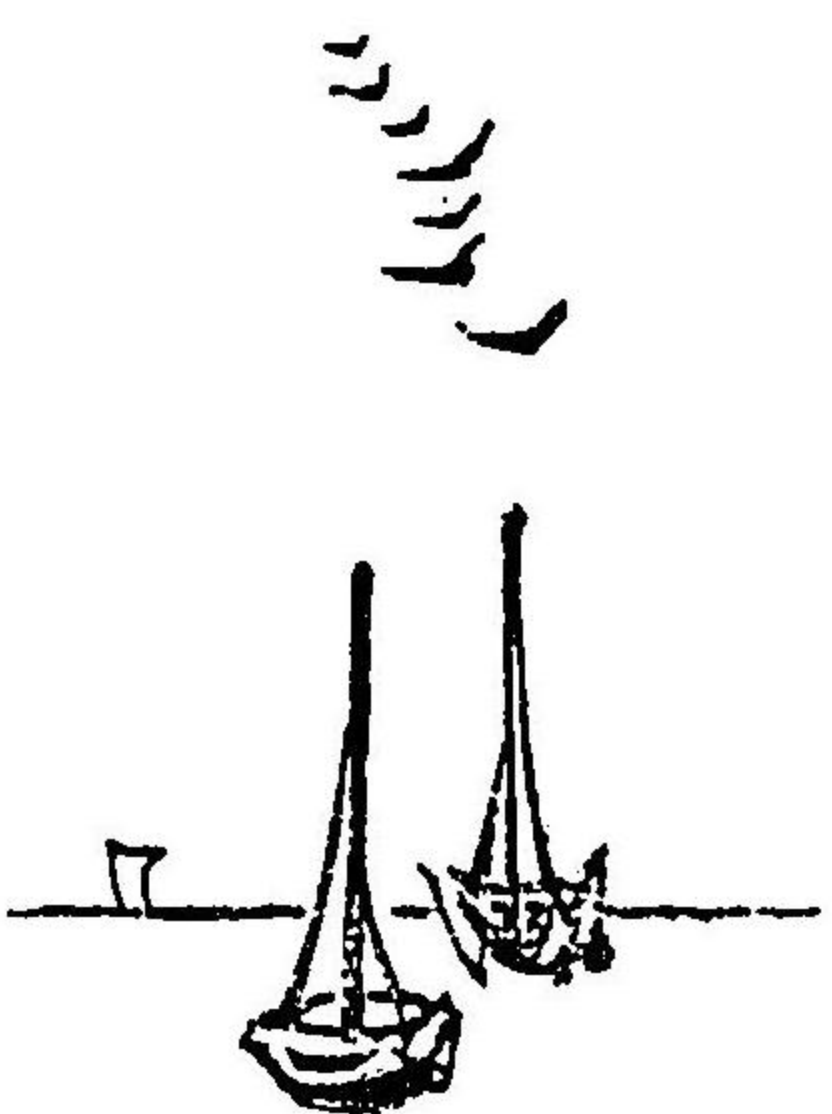
印刷者 金子久太郎

兵庫縣神戸市兵庫湊町
二丁目二十六番地

印刷所

會社名 金子印刷所

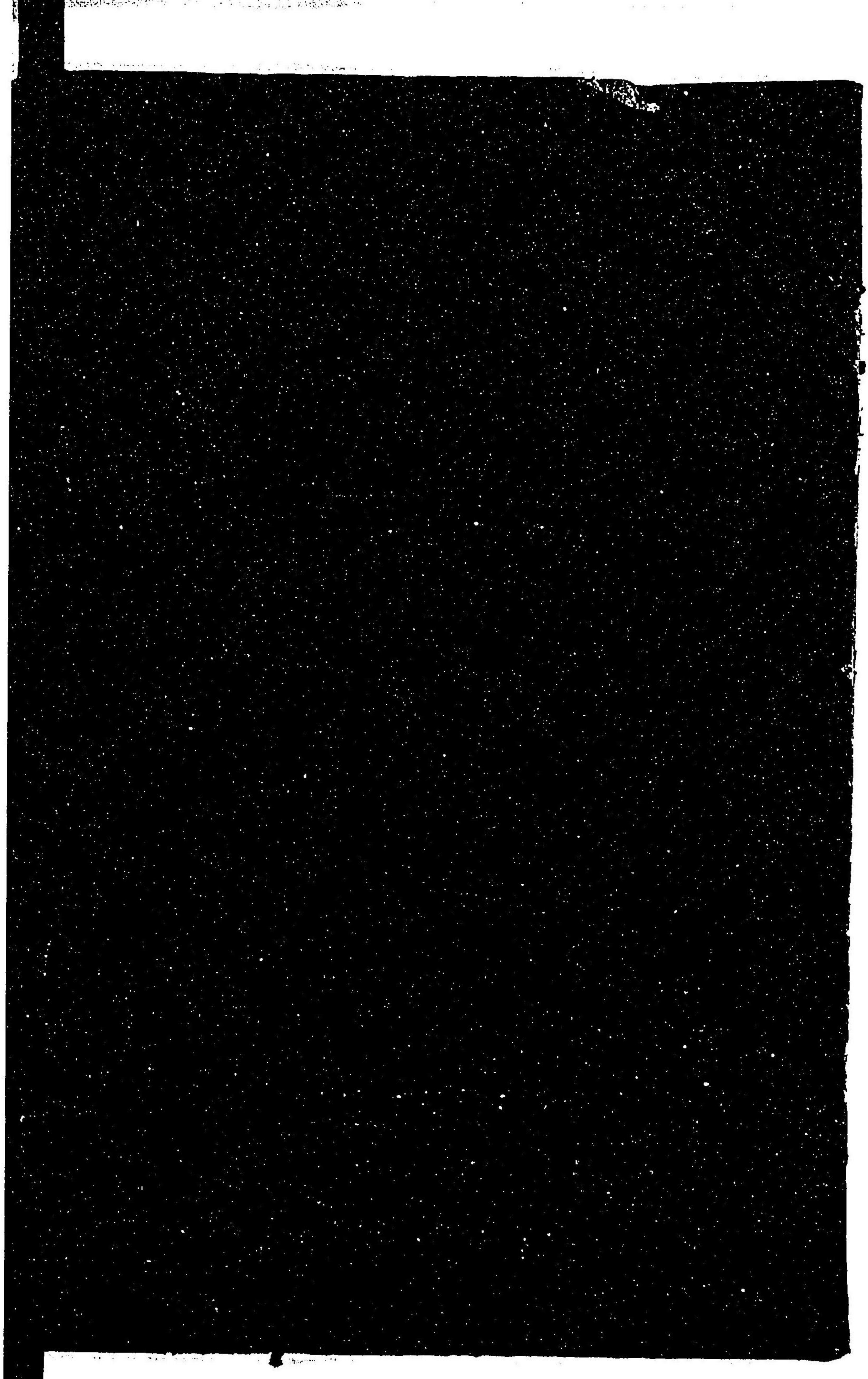
兵庫縣神戸市兵庫湊町
二丁目二十六番地



97
496

9. 1. 12

97
107





026336-000-0

97-496

宮崎県案内記

若山 甲蔵 / 著

M40

ADC-4122



